

「女」(め・おんな)を語頭に持つ語彙

岡野信子

「女」(め・おんな)を語頭に持つ語の総体を整理してみたいという思いは、世阿弥の「花伝書」の中で、「男時」「女時」なる語に出会った時以来、私の中にあった。

その動機はかならずしも語学的なものではなかったが、整理していくうちに、これは日本語造語法、また命名法の研究であると、みずから納得するにいたった。

ところで語の総体を得る一つの方法は辞書の利用であるが、私は語数の多いものという基準で、小学館の『日本国語大辞典』を用いた。そのほか多くの国語辞書・方言辞典を参照したが、書名は省略させていただく。地名関係の語の蒐集には、『日本地名索引』(金井弘夫編、アポック社、一九八一年)を用いた。このほかにも、たまたま読んでいた小説の中の語、あるいは身近に聞く方言語詞をとりあげてもいる。

「女」関係の語をとりあげるとなれば、「め」「おんな」のほか、「めん」「めす」、「おみな」「おなご」、さらに漢語の「にょ」「じょ」、あるいは「女子」「女性」「女流」も考えられるが、この稿では「め」と「おんな」だけを扱っている。

「女」(め・おんな)を語頭に持つ語彙

「め」「おんな」を語頭に持つ語には、それに接頭辞性を認め得るものがある。また「め」「おんな」が複合語の上部要素として働いているものがあり、「め」「おんな」を語基として、これに接尾辞の添うた語もある。まず、「め」「おんな」が接頭辞として働いているものからとりあげて、順次見ていく。

一、「め」(女)を語頭に持つ派生語

語頭の「め」が「女性」の意味を持たず、ある状況のシンボルとして働いているばあい、これを接頭辞と考えた。すなわち、この種の「め」は派生語である。これの中には、対立する「お(男)」を持つ語と持たない語とがある。まず対立語「お(男)」を持つ語からとりあげる。

1 対立語「お(男)」を持つ「め(女)」

この類の語の接頭辞「め(女)」は、「小さい」、「やさしい」、「美しい」、「二流である」、「劣っている」などの意味を象徴する働きを見せている。

(1) 接頭辞「め(女・雌)」が、「小さい」、「低い」、「ゆるや

か」などの意である語

女岳（雌岳）・女山（雌山）・女坂・女島（雌島）・雌岩（めすいわ）・女滝（雌滝）・女埒・女垣

これらの語は、相並ぶ二つのものを一方を「お（男）〜」、一方を「め（女）〜」と呼んでいるものである。すなわち、女岳・女山は、一方のきびしい山——男岳・男山——に対して、低い、あるいはなだらかなほうの山を言っている。女島・雌岩も小さな島、小さな岩であり、女滝は二すじの滝のうち、水勢がゆるく、小さい方の滝を言う語である。「埒」は馬場の周囲に設けた柵で、高く結った左手のものを「オラチ」（雄埒）と言うのに対して、右手に低く結ったものが「メラチ」（雌埒）である。「女坂」という語は、『日本書紀』神武即位前紀戊午年九月の条に「又於女坂置女軍、男坂置男軍」と見えている。書紀は、女坂の名の由来を、女軍を置いたからだと記すにとどまるが、前後の状況から、また江戸時代の文献に見える「おんなさか（女坂）」の意味から類推して、傾斜のゆるやかな坂を言う語と考えた。

(2)接頭辞「め」（女・雌）が、「弱こ」、「やさこ」、「美しい」などの意である語

女波・雌拍子・女博士・女（雌）松
「女波」高低のある波の、低く弱く打つ方の波。高く強く打つのが「男波」である。

「雌拍子」雅楽の太鼓の奏法に言う語で、左手のばちで打たれる弱い拍子を言う語。「雄拍子」の対語。今日では「雄埒」（おぼち）・「雌埒」と言う。

「女博士」（めはかせ・めばかせ）音曲における陰（いん）の調子、すなわち美しく少し弱い調子。「男博士」の対語である。

「女松」赤松を言う。これも美しくやさしい姿の松の意であろう。黒松が「男松」である。

(3)接頭辞「め」（女・雌）が、陰・副・劣などの意である語

女時・めて・女軍・雌虹・雌針・女（雌）節・女暮・雌鳥羽
「女時」世阿弥の著『風姿花伝』の「花伝第七別紙口伝」中に、「また、時分をも恐るべし。去年盛りあらば、今年は花なかるべき事を知るべし。時の間にも、男時・女時とあるべし。」とある。芸に花のない時、スランプの時、すなわち陰の時を「女時」と言っている。

「めて」『日本国語大辞典』は、「劣っているさま」、「落ち目であるさま」と説明するが、漢字は当てていない。「女時」から、「女手」と類推する。江戸時代の浮世草子や浄瑠璃本にも見えているようであるが、『長門方言集』（重本多喜津著、昭和五十一年、国書刊行会復刻）に、「下手をうち、負けをとることをへメテをやる」といふ」とある。

「女軍」（めのいくさ）「女坂」の項にすでに記したように、『日本書紀』中に見える語である。『日本国語大辞典』は、語義未詳とした上で、「一説に、男軍（おのいくさ）・女軍（めのいくさ）とは追手（おうて）・搦手（からめて）のことで、敵軍の後側に攻めかかる軍隊を女軍とする」と説明する。「女」は正に対する副を象徴していると思われる。

「雌虹」二重にかかった虹の、内側に薄く見える方が雌虹であ

る。「雌」には副次的、二次的の意が託されているのであろう。外側の大きく濃い方を「雄虹」とする。

「雌針」 『日本国語大辞典』、『新潮国語辞典』はともに、「長い針目、大針」と説明する。大小の針目で縫う時、大針は内側、裏側に出る針目であるから、「女」はすなわち「陰」、「副」を意味している。

ところで、私が下関市域・北九州市域で調査した範囲では、人々の答は小さな針目が女針、大きな針目が男針である。「女」を「小」のシンボルとして理解しているのであろう。

「女節」 雌節ともある。鯉の腹部の肉でつくった鯉節だということから、背肉で作った男節（本節）につぐ二流品が女節だと理解できる。

「女幕」 陽の幕の「男幕」に対して陰の幕が「女幕」である。幕の両端の折り方が違うようである。

「雌鳥羽」 メンドリバとも。雌鳥は左の翼で右の翼をおおうところから、左を上、右を下にして物を重ねることを言う。「雄鳥羽」の対語である。

以上、(1)から(8)までの分類を試みたが、これらは一連の発想のものであり、文献の上では早く『日本書紀』に見えていることはすでに述べた。『日本書紀』は、「古天地未剖、陰陽不分」から始まるが、これは「古に天地いまだ割れず、陰陽分かれざりしとき」と訓ぜられる。私はこの訓がいつごろのものであるかを明確にすることはできないが、かなり古いところからこのように読まれているので

「女」(め・おんな)を語頭に持つ語彙

あろう。陰陽の思想は中国思想の受容であらうが、これに「女・男」を当てる考え方は長く伝えられた。世阿弥の『花伝書』などにもそのことは濃く見えている。天地の万物を陰・陽、すなわち女・男と分ける時、「女」はおのずから上記のような状況をシンボライズする語として用いられることになったのである。

(4)接頭辞「め」(女)が豊穰を意味する語

女穂

『日本国語大辞典』は、「稻などの穂のうち、基部で第一枝梗が一本だけ出ている通常の穂を男穂というのに対して、第一枝梗が二本対をなして出ているもの。豊作種として尊重される」と説明する。出典は島崎藤村の「千曲川のスケッチ」である。手元の諸辞書・方言辞典には見えないので、さほど一般的に用いられた語ではないのかもしれない。

生む力を持つ女性が豊穣のシンボルであったことは先史時代にすでに見られると聞いている。「女穂」の語形は新しいもののようにであるが、ここにある思想はきわめて古い土俗的なものである。

(5)接頭辞「女」「男」を冠して一対のものを言う語

女瓦(牝瓦)と男瓦(牡瓦)・雌臼と雄臼・雌ねじと雄ねじ・雌紐と雄紐

これらは性交の形からの見たてものである。雌ねじ―雄ねじを除いてはいずれも古い語である。民間語としてはこれら以外にも、この種の語は、たとえば大工道具、大工仕事などに多く得られそうである。

2 対立語「男」を持たない「女」

この類は、ある語の上に「女(雌)」を冠したもので、このばあいも、「め」がシンボライズするところは、「小さい」、「きしゃやである」、「第二のもの」、「似ている」などと、前項のばあいと同じである。この類の語は草木名にことに多い。

(1) 草木類の名

小蒜(めびる―野びるの異名)・雌樗(めがや―犬がやの異名)
・雌しだ・雌日芝(めひしば・めひじは・めしば)・雌刈萱(めがるかや)・女蒲(めかま)・女薊(めあざみ)・野芥子の異名
・雌宝香(めたからこう)・雌牛膝(めごしつ―葉黒草の異名)
女竹(めだけ―なよ竹)・女四手(めしで)・雌椴(めざくら―深山桜の異名)・女榿(めがし)・白榿・女胡桃(めくるみ)・雌櫟(めくぬぎ)・女桂(めかつら―肉桂の異名)めひらぎ(雌椋―りんぼくの異名)・めひるぎ(雌榿木)・女石楠(めしやくなげ―日陰つっじの異名)・雌椋木(めむくの木―榿の異名)・雌椋(めむく―椋木の異名)雌瓜木(めうりのき―瓜楓の別名)
この類の中で、「小蒜」「女胡桃」の「め」は、その形の小さいことを言っている。「女竹」は「なよたけ」の別名にも知られるように、その姿のきしゃやなことを言う名であらう。「女薊」もとげがなく柔らかいところに注目した名であらうか。「赤四手」の別名もある「女四手」は、秋に美しく紅葉するところに注目した「め」(女)であらう。「めがや」には「犬がや」という名もある。「雌櫟」はその葉の形が正しくないという。これらは、似て二流なるものゝ意の「め」(女)かもしれない。その他の名の「め」の意味もこの類であらう。

(2) 魚貝類の名

女鯛(めだい―いしなぎの異名)・女鯉(めかつお―そうだがつおの異名)・雌鮪(めごち)・雌貝鮑(めがいあわび)・女冠者(めかじゃ―しゃみせん貝の異名)・めんどり(ひめじの異名)
「女鯛」は鯛に似ているが味は劣る。また「女鯉」は鯉より小形であり、「めがいあわび」は「まだかあわび」より小形だという。
「め」(女)の働きは、魚貝類の名のばあいも同様である。

(3) その他

雌虎(めとら)・女大黒(めだいこく)・女モール

「雌虎」享保二年の『書言字考節用集』は、「豹メドラ」と記し、『古楽府』の「則虎弟」をも引いている。豹が虎に似た動物であることは早くから知られていたようで、『倭名類聚抄』(二十巻本巻十八)にも「似虎而円文也」とある。

「女大黒」大黒柱に次ぐ重要な柱をこう呼ぶ所が、長野県・静岡県・愛知県にある。『綜合日本民俗語彙』は、「愛知県北設楽郡などでニダイコクとも言うのは、二大黒と解する者があつたのである」と説いている。

「女モール」モール革の薄いのを言う。

以上、「め」(雌・女)がシンボルの接頭辞として働いている語をとりあげてきたが、その語彙分野は自然・人事の諸般にわたっていで、草木名にはことにそれが著しかった。

これらの語の出典を見る時、「め(女)」のこのような接辞的利便は古くからのものであることがわかる。

二、おんな(女)を語頭に持つ派生語

この語彙の中で、女山・女坂・女松・女竹・女結び・女瓦・女白の「おんな」は「め」を言いかえた語であろう。いずれも新しいことばのようなのである。「めく」に見えなかった語には以下のものがある。

「女絵」(おんなえ) 平安時代の物語や日記に見えている語である。たとえば現存の『源氏物語絵巻』がそれで、貴族社会の女性たちが愛好した物語絵に見られる、情趣に富んだ絵である。一方、「男絵」は、唐絵の伝統に立つて、墨の描線を生かし、彩色を施した力強い絵を言う。

「女節」(おんなぶし) 『日本国語大辞典』は語義未詳とした上で、「能楽で、小歌節(こうたぶし)と同じか」と説く。出典として『申楽談儀』中の用例があがっている。

「女水」(おんなみず) 軟水を言う。「男水」は硬水であるが、『俳諧類船集』には、「せんじたる茶にうめ水をさすを男水といふにや」とある。

「女膝」(おんなひざ) 『総合日本民俗語彙』に、「熊本県天草の島々で、胡座をオトコヒザというに対して、正座することを女ひざという」とある。福岡県域では、子供たちのことばに「オカサンズワリ」(正座)、「オトサンズワリ」(胡座)を聞く。

「女爪」(おんなづめ) 細くてきゃしゃな爪。短く丸いのを「男爪」と言う。福岡県下で聞く。

「女跳び」(おんなとび) 子供たちの縄跳び遊びの折、上品な

「女」(め・おんな)を語頭に持つ語彙

跳び方を「女跳び」と言い、活潑な前跳びを「男跳び」と言う。福岡県域で聞く。

「女侍」(おんなざむらい) 意気地のない武士をあざけて言う語。「男侍」なる語は見えない。

「女芸」(おんなげい) つまらない芸。「男芸」という語はこれと対応しない。

「女金漆」(おんなごんぜつ) 植物「こしあぶら」の異名である。

これらのうち、「女絵」、「女節」以外はいずれも新しいことばである。

以上、シンボルとしての接頭辞「女(め・おんな)」を見てきた。この造語法は、『日本書紀』といった古い文献以来現代まで続いている。今日も、たとえば「女爪」、「女跳び」のように、民間で、また子供たちの間で、容易にこの種の語が造られていることに注目させられる。歴史の長い造語法というべきであろう。

さて、シンボルとしての役割りを担う接頭辞には、このほかにどのようなものがあるだろうか。たとえば「赤鹽」(まったくのうそ)などはそれであろうか。九州地方では死の汚れを「黒不浄」(クロフジョー)、出産の汚れを「赤不浄」(アカフジョー)と言うが、この「黒」「赤」もシンボルとしての接頭辞と見られる。ただし、これら以外のものを今は思いつかない。いや、漢語であるが、「小生」、「豚児」などの謙辞もこの類に数えられるであろうか。ともあれ、シンボルとしての接頭辞はかなり特異なものであ

るまいか。

ところで、漢語のばあいはいかがであろうか。「大漢和辞典」は、たとえば「女垣」には、『説文通訓定聲』の「曰女垣、三云、言女、皆小意、猶言小牆」也をあげている。また「女苑」（ひめしおんの異名）には、『本草綱目』の「其根似女体柔婉、故名」が引かれている。これらの「女」の意味するところは、和語の「女」（め・おんな）と同様である。

ただし、菊の異名の「女華」、「女節」などの「女」は「秋」を表わしているのではあるまいか。また「女鳥」は小児の衣を見ればかならず毛を飛ばせて、その児に発熱させるといわれている虫であるが、別名を「夜飛遊女」とも言う。「女鳥」の「女」は、あるいは「夜」の意ではあるまいか。

このように、接頭辞風に用いられた漢語語頭の「女」は、和語の「女」（め・おんな）のばあいより、意味が広そうである。もともと「大漢和辞典」は「女」の意味として、「陰陽に配して陰にあてる」、「易では、坤・兌・巽・離等にあてる」、「しなやか。又、小さいものの喩」などもあげている。とすればここにとりあげた語の語頭の「女」は、シンボルの接頭辞と考えるよりは、複合語の前部要素で、修飾の働きのもとと考えるべきかもしれない。

三、め（女）を前部要素とする複合語

語頭のめが「女性」の意味を持つものを複合語と考えた。

1 人間を言う語

女子（めのこ・めんこ）・女子子（めのここ）・女親（めおや）

・女君（めぎみ）女童（めわらわ・めらわ・めのわらわ・めならわ）
・女童部（めわらべ・めらべ・めのわらわべ・めならわべ）女
奴（めやっこ）・女子奴（めのこやっこ）・女髪長（めかみなが・
めのかみなが）尼僧（めどうじ）・女童子（めどうじ）・女本尊（めほんぞん）
小説などの女主人公）・女唐人（めとうじん）西洋の女性）
ここに記した語は、最後の三語を除いては「和語+和語」の語構
造の語で、その出典も平安朝以前のものである。「和語+漢語」の
語構造の三語のうち、「女童子」は江戸時代の浮世草子に見える語
であり、「女本尊」は坪内逍遙の『小説神髓』中に見えている。
「女唐人」も明治のことばである。

2 人間以外のものを言う語

(1) 動植物を言う語

牝獣（めけもの）・牝馬（めうま・めうめ・めま）・牝牛（めう
し・めうじ）・牝鹿（めしか・めしか・めか・めが）・牝豚（め
ぶた）・牝羊（めひつじ）牝熊（めぐま）・牝猿（めざる）・女
狐（めぎつね）・牝犬（めいぬ）・牝猫（めねこ）・雌鯨（めく
じら）・雌鳥（めどり・めんどり・めすどり・めちよう）・雌鷲
（めわし）・雌鴛鴦（めおしどり・めおし）・雌蜂（めばち）・
雌鳥（めんごーめんどりの方言）・雌蝶（めちよう）・雌魚（め
いお）・女木（めぎ）・雌麻（めあき）・雌花（めばな）・雌蕊
（めしべ）

当然のことながら、この類の語は動物に多く植物に少ない。接頭
辞「女」（め）を冠したもののばあいは逆であった。

(2) その他

女神(めがみ・めのかみ)・女星(めぼし)・女七夕(めたなはたー織女星)・女雛(めびな)・女餓鬼(めがき)・女踏歌(めどうか)・女時計(めどけいー女持ちの時計)・女唐服(女性の洋服)・女唐傘(めとうがさーパラソル)

「女時計」以下は明治期のことばである。

3 「め(女)」が対格である語

女捕(めとり)・女狂(めぐるい)

「女捕」は、道で女を捕えて強姦すること、「女狂」は男性が女色におぼれることである。

語頭に「め(女)」を持つ複合語は以上であるが、これは後の、「おんな(女)」を語頭に持つ複合語とくらべるとはるかに少なく、かつその内部が単純である。

四、おんな(女)を前部要素とする複合語

先の、「め」を前部要素とする複合語にくらべると、きわめて多量であり、その内部も多様である。ただし、「め」複合語には人間以外のものについて言う語も多かったが、「おんな」複合語には、それは数語が見られるのみである。

1 人間以外のものを言う語

女神・女星・女雛・女牛・女犬・女猫・女雛(おんなびな)

これらはいずれも江戸時代以降の造語になる語で、さきの「め」を言いかえたもののようにである。

2 さまざまな女性を言う語

「女」(め・おんな)を語頭に持つ語彙

この内部の分類はむずかしい。ひとまず次のように整理を試みた。

(1)さまざまな立場の女性を言う語

女御子(おんなみこ)・女官(おんなみや)・女東宮(おんなとうぐう)・女一宮・女二宮・女三宮・女公達・女君・女童(おんなわらわ)・おんなわらわ・おんなわらわべ・おんなわらんべ・おんなわろうべ)・女親・女同胞・女きようだい・女仲間・女傍輩・女友達・女王(おんなあるじ)・女戸主・女主人・女刀自(おんなとじ)・女隠居・女寡(おんなやもめ・おんなやまめ)・女地主・女家主(おんないえぬし)・女施主(おんなせしゅ)・女主人公・女客人(おんなまろうど)・女客・女賀客・女礼者・女異人・女じゃ者・女成金・女鉄拐(おんなてっかい)

「女鉄拐」は「好色一代女」に見える語で、年老いながら若くみせる女を言う。鉄拐仙人が空中に自分の姿を吐き出したという伝にもとづく。

(2)ある働きの女性を言う語——江戸時代以前の語

女使・女巫子(おんなみこ)・女法師・女医師・女医者・女手書(おんなてかきー女性の能書家)・女右筆・女預(おんなあずかり)・女寺屋・女頭・女扈從(おんなこしょう)・女従者(おんなずき)・女小姓・女六尺・女師匠・女六俳仙・女幫間(女太鼓)・女物師・女髮結・女按摩・女芸者・女大夫・女踊子・女巡礼・女六部・女武者・女家老・女伊達・女浪人・女虎落(おんなもがり)・女団七・女山賊(おんなやまだち)・女道楽(おんなどら)

これらのうち「女使」は、中古、春日神社、賀茂神社の祭に朝廷から勅使として遣わされた内侍である。「女手書」の出自としては「大鏡」があがっている。これも平安時代にはあつた語と考えられる。「女巫子」の典故はあがっていないが、「巫女」は「梁塵秘抄」に見えるので、「女巫子」もそのころにあつた語と考えてよいであろうか。「女法師」、「女従者」の典故には「古本説話集」があがっている。「女山賊」は狂言の中に見える。

これら以外は江戸時代の文献に見えている語で、「女々」という複合語は江戸時代になってにわかに文献の上に多く現れるのである。

(3)ある働きの女性を言う語——明治以降の語

女役者・女芸人・女義太夫(女義太とも)・女学者・女事務員・女ボーイ・女人夫・女乞食・女天一・女將軍

このように、江戸時代のものにくらべるとはるかに少ない。またこれらの語は、今日、理解はできるが日常語としてはほとんど使用されていない。「女天一」は女天一坊の略で、坪内逍遙の「当世書生気質」に見えている語である。

以上、「メ」あるいは「オンナ」を上部要素として女性を表わす語を見てきた。それは人間のほかに、動植物、神、星、餓鬼、雛人形と広い範囲にわたっている。

「女性」であることを表現するには、このほかに、「メン、鳥」、「メス、犬」のように「メン」「メス」をつけて言うこともあるが、「メン」「メス」を上部要素に持つ語はごく少数である。そして

「メン」「メス」も「メ」の属である。

また「オンナ」属の「オナゴ」、「オミナ」を上部要素とするものには、「オナゴ亭主」(女主人)や「オミナ神」があるが、これも辞書の上では一例ずつ得られた程度である。漢語を用いた「女学生」、「女官」、「女流作家」の類も、例はさして多くない。つまり日本語造語法においては男性女性の区別は、「メ」と「オンナ」およびその属の少数の語でなし得ている。

一方、漢語のばあいは、男女を区別するのに、男女、雌雄、牝牡と、少なくとも三種の別はあるようである。また英語のばあいは次表に記すようにきわめて多種である。これは語源がさまざまであることにもよるのである。次表は、市川三喜編「英語学辞典」(研究社)、長井氏改訂「英語ニューハンドブック

英語のばあい

- 1 男性と女性が別語
ox, bull (牡牛) cow (牝牛)
cock (おんどり) hen (めんどり)
- 2 男性語に接尾辞をつけて女性語を造る
god (神) goddess (女神)
prince (皇子) princess (皇女)
lion (ライオン) lioness (雌ライオン)
- 3 女性語が男性語の語尾を変じて—ess をつけるもの
actor (男優) actress (女優)
tiger (おす虎) tigress (めす虎)
- 4 女性語が、ess 以外の語尾変化によって造られたもの
comedian (喜劇役者) comedienne
hero (物語の主人公) heroine
- 5 男性、女性に別語をつけるもの
(1)性別語を前につけるもの
bull-elephant cow-elephant
cock-pheasant hen-pheasant
(雄きじ) (雌きじ)
dog-ape (雄ぎる) bitch-ape
he-goat (雄やぎ) she-goat
(2)性別語を後につけるもの
turkey-cock turkey-hen
雄のしちめんちょう 雌のしちめんちょう

ク」(研究社)によって作製したものである。

いずれにしても、日本語のばあい男女の言いわけがこのように単純であることは、日本語命名法の一特色と考えることができる。

3 女性的な容姿・心情・思慮を言う語

女気(おんなげ・おんなつけ)・女切れ(おんなぎれ・おんなつきれ)・女振り(おんなぶり・おんなつぶり)・女体(おんなてい)・女様・女姿・女影・女懸り・女事・女言・女声・女顔・女付き・女面(おんなづら)・女心・女心地・女気・女氣質・女性根・女計い(おんなばかり)・女分別・女了簡・女知恵・女好み・女好き・女惚れ・女盛り・女冥利・女冥加・女の道

これらの語の中、「女心」については、『日本国語大辞典』は、「女心のはかなさは、都を独あこがれ出て」(謡曲・女郎花)、「つきせぬあはれは女心のくせにて」(浮世草子・好色万金丹)「女心の一筋に、思ひ詰めたるこの身のわづらひ」(歌舞伎・東海道四谷怪談)をあげている。やさしさ、一途さが女性特有の気持と考えられていると察せられる。

一方、「女計い」、「女分別」、「女了簡」、「女知恵」は、いづれもあさはかなもの」とらえられており、「女性根」も「欲の深い女性根」(歌舞伎・心謎解色糸)とされる。

これらの語の用いられ様を見ていく時、女性の心情・思慮に対する評価を読み取ることができる。「女の道」が、「源氏物語」には「色恋の道」の意味で出ており、江戸時代の浄瑠璃には「女の守るべき道」の意になっている。

4 女性の服飾・用具などを言う語

「女」(め・おんな)を語頭に持つ語彙

女の装い・女装束・女出立・女帷子・女広袖・女帯・女鬘・女笠・女傘・女頭巾・女被り^{かぶり}・女足袋・女草履・女雪駄・女下駄・女の隠し道具・女扇・女車・女輿・女駕籠・女乗物・女長柄・女鞍・女船・女物・女模様——江戸以前

「女船」は女だけが乗っている船である。
女帽・女羽織・女袴・女靴・女乗り(自転車など)・女箆笥・女持ち・女向き・女柄——明治以降

5 女性のかかわる芸能・遊戯を言う語

女楽・女舞・女踏歌・女曲舞・女田楽・女猿楽・女能・女狂言・女祭文・女浄瑠璃・女歌舞伎・女芝居・女役・女踊り・女手踊・女相撲・女面・女物狂・女木偶・女鞠・女剣劇

「女鞠」は女性のする蹴鞠で、遊戯である。遊戯を言う語はこの一語のみである。

これらの中で、明治以降のものは「女剣劇」の一語のみである。女性を主役としたこの剣劇は昭和五年ごろ生まれた。

6 女性のいた、さまざまな場所を言う語

女所・女方・女寺・女宿・女茶屋・女棧敷・女牢・女溜り・女部屋・女座・女湯・女風呂・女塚

「女所」、「女方」は、平安時代、禁中で女房の控えた場所である。「女宿」は、江戸時代、女性の奉公人の身元を引請けて周旋した家と言う。また、いわゆる娘宿を「女宿」とも言う。「女溜り」は「女牢」とおなじく留置場である。「女座」はいろりのそばの主婦の座である。

7 女性の年中行事などを言う語

諸地方にさまざまにある。以下にあげたものは、「日本国語大辞典」と「綜合日本民俗語彙」から得たものである。説明は省略して、地域(多くは県名)と時期とを記した。

女礼(正月)・女の正月(東北地方、一月十五日、または一月二十日) 女正月(京都、一月十五日)、女の年取り(東北地方、正月十四日、または十五日)、女節分(京都、一月十九日)、女のヒアリ(千葉、一月十九日・二十日)、女オビシヤ(千葉、一月二十七日)・女の節供(全国、三月三日)・女の天下(香川、五月四日)・女の晩(群馬、五月四日)・女シノウチ(群馬、五月四日)・女の家(諸地、五月節供)・女の屋根(神奈川、五月五日)・女名月(福岡、九月十三日)・女の神事(福島、十一月十五日)・女御頭屋(長崎、秋の二十三日)

正月の多忙の後の慰勞、あるいは田植えや稲刈りといった重労働の前後の慰勞がこのような形でおこなわれていたのである。

女一見(オンナイチゲン、群馬)・女残酒(石川)

「女一見」は、花嫁の姉妹やおばが御方に招かれることを言う。

「女残酒」は嫁取りの翌日の慰勞宴である。

女相撲(秋田、雨乞い)

女講(仏道修業のための講)

8 女性の生活の諸相を写している語

(1) 女叙位・女冠(おんなこうぶり)・女公事(おんな公事) 女性の起こした訴訟)・女禁制・女不入田(おんないれずのた)・女手形・女通手形・女手形証文・女切手(女手形に同じ)・女旅

位階を授けられる女性、訴訟を起こした女性と、さまざまな生活相がことばの上に見られる。女性は不浄とされた、また閨所の通過は男性よりより厳しくチェックされた。そのような生活がここに見える。

(2) 女口・女所帯・女天下・女縁者・女腹・女子供

「女腹」は女兒ばかりを産む女であるが喜ばれなかった。「女子供」は足手まといといった心持ちで使われることが多い。「女縁者」は妻、娘および妻方の親類を総称する語である。夫がわの縁者よりは軽視された。

(3) 女仕事・女わざ・女力・女手・女文字・女筆・女文・女文章

(4) 女談合・女知音(おんなちいん) 女の同性愛)・女まじり・女酒盛り・女夜遣

これらの諸語は、そのことばの担う内容、つまりは女性がどのように遇され生きてきたかを考えさせる。

9 「おんな」(女)が対格要素である語

「女」を上部要素とするが、一語の語意は、男性の女性に対する態度、あるいは女性との交渉を言っているものをここに集めた。

女縁・女運・女沙汰・女自慢・女道楽・女三昧・女狩り・女買い・女食い・女選み・女話・女遊び・女荒し・女たらし・女狂い・女ごかし・女殺し・女出入り・女嫌い・女受け・女擦れ・女任せ・女形(女方)

これらの語の半ば以上は江戸時代の作品に見えるもので、それより古いものは、「女狂い」の初出が「虎明本狂言・鏡男」と記されているばかりであった。初出が明治以後らしい語も十語あった。

10 その他

女鳥・女達磨・女武道・女悪・女首・女読み

説明は省略する。なお、江戸時代の女子教育書には「女」の名のものが多く、ここにはとりあげていない。

五、「女(め・おんな)」に接尾辞の添うた語

「女郎」の「郎」を接尾語と認定することができるであろうか。ひとまずそのように認定するとして、「め(女)」に接尾辞の添うたものはこの一語である。

「おんな(女)」に接尾辞の添うたものは以下の諸語である。

女子(おんなご)・女衆(おんなしゅう・おんなし)・女輩(おんなばら)・女ども・女どち・女どし・女連れ・女殿・女殿・女じるし・女一三昧(おんないっさんまい)・女日照り

これらの接尾辞の多くは複数を表わすものであるが、「女殿」の「殿」は敬意を示す接尾辞である。ただし「女殿」は、山梨県静岡県で女中を言う方言である。「女じるし」の「じるし」は「遠まわし」に表現する語と説明されている。また「女一三昧」は「女のこ」と、女色に専念することだという。「女日照り」は「男が好ましく思う女の数が少ないこと」だという。とすれば、「日照り」は比喩的、あるいは象徴的接尾辞と考えてよいであろう。

「女」(め・おんな)を語頭に持つ語彙

おわりに

語頭の「女」(め・おんな)に接頭辞の働きと複合語の要素としての働きのあることに気づいて、語彙総体の上にその状況を明らかにしようとした。

その結果、「め」には接頭辞性がより濃く、三拍語の「おんな」には、複合語要素としての働きのより濃いこともわかった。当然のことであろう。

もともと、「め坂」から「おんな坂」へ、「め竹」から「おんな竹」へといった移行状況もある。また方言社会には、「おんな膝」、「おんな爪」、「おんな跳び」という新造語もあって注目させられる。そのように、とかく「男」「女」を借りて、ある状況を言おうとするのは、どのような伝統を負っているのであろうか。今、関心はその方向により強くなっている。